

## サン・ヴィクトルのフーゴー 『愛の実体について』

松 村 良 祐

### 〔解題〕

パリの街並みを眼下に臨むセーヌ左岸のサン・ジュヌヴィエーヴの丘に設立されたサン・ヴィクトル修道院で学究生活を送り、サン・ヴィクトル学派の礎を築いたサン・ヴィクトルのフーゴー (ca.1096-1141) は、『ディダスカリコン — 読解の研究について (*Didascalicon de studio legendi*)』の著者として、学問論ないしは読書論という観点から現代においても言及されることが多い思想家である<sup>1</sup>。イヴァン・イリイチは『テキストのぶどう畑で』(1993)の中で、『ディダスカリコン』への注釈をもとに、読書という行為に対する人々の認識の時代的な変遷に注目する。彼によれば、フーゴーの生きた12世紀は「修道士の読書」と「学者の読書」という二つの読書のあり方が不可分に結び付いていた時代であるという。修道士の読書が聖書に語られている内容を実践し、自己の生き方へと結実させる道徳的な修養であるのに対し、学者の読書は厳密なテキスト読解にその力点をおく。イリイチがフーゴーに注目するのは、

---

<sup>1</sup> フーゴーの生涯に関する確定的な情報は、彼がサン・ヴィクトル修道院の参事会員 (canonicus) で、そこで1141年に没したということを除いてごく僅かである。片山寛、「サン・ヴィクトルのフーゴー、その生涯」『西南学院大学神学部論集』第61巻(2004):33-51頁は近年の研究成果を踏まえて、サン・ヴィクトル修道院をめぐる当時の状況と共に、フーゴーの生涯を詳細にまとめている。また、白水浩信、「Disciplinaの系譜学：サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』を読む」『北海道大学大学院教育学研究員紀要』第139号(2021):26頁も参照。

フーゴーが『ディダスカリコン』においてそうした現代とは異なる読書のあり方を「読書の術 (ars legendi)」として詳細に論じていると考えるからである<sup>2</sup>。しかし、13世紀に入り、修道院とその付属学校からアカデミックな慣習に基づく大学が徐々に生まれていくことで、それら2つの読書のかたちは次第に切り離されていったとされる。イリイチの目的は、こうした歴史の古層に眠る読書のあり方を掘り起こすことで、学者の読書という習慣を通じて失われた現代の読書のあり方に再考を促すことにある。

イリイチは、『テキストのぶどう畑で』の冒頭でこの著作の目的を次のように述べている。

「いつの間にか、画面が、マスメディアが、従って「コミュニケーション」が、書物に、文字に、つまり読書に取って代わってしまった。そこで私は、現在幕を閉じつつある読書主義が、どのようにして始まったのかについて考えることにしたいと思う。この読書時代を独占してきたのは、書物が好きな人々の行う学究的な読書の形態であった。しかし、この読書のかたち以外にも書物には多くの接し方が存在するはずである。読書時代には花開くことのなかった書物との様々なかかわり方を研究するための好機が、いま到来した<sup>3</sup>。」

現代は読書の形態が本からコンピューターへと切り替わろうとする過

---

<sup>2</sup> 12世紀は都市が形成され、喧騒に満ちた都市の住人、一般大衆が誕生する時代であるという。イリイチは、フーゴーは世俗との関わりを持つ修道参事会員が修道士の読書と学者の読書を含めた聖なる読書を通じて自己の内に形作った「生きる姿 (forma vivendi)」を都市の住人たちに示し、彼らの生の模範となることで、その啓発を行うことを考えていたという。イヴァン・イリイチ、岡部佳世訳、『テキストのぶどう畑で』(法政大学出版局、1995年)：78-86頁。

こうしたイリイチの主張に関しては、安田智博、「後期イヴァン・イリイチにおける主体性／統治の別のあり方について——『テキストのぶどう畑で』のなかでの「読書」に関する考察——」『Core Ethics』vol.17 (2021)：231-240頁に学ぶところが大きかった。

<sup>3</sup> イリイチ、前掲書、ix頁。

渡期にあたり、だからこそ、我々の書物に対する関わり方を考え直す絶好の機会であるとイリイチは考える。こうしたイリイチの主張は、フーゴーのテキストが持つ豊かな可能性の一端を現代に示す好例であると言えるだろう<sup>4</sup>。

もっとも、ボナヴェントウラが「アンセルムスは推論に、ベルナルドゥスは説教に、リカルドゥスは観想に優れている。しかし、フーゴーはその全てに優れている (Hugo vero omnia haec)」と述べ<sup>5</sup>、その才能と知識の浩瀚さを讃えたように、フーゴーの著作は『ディダスカリコン』のような読書論あるいは学問論に限られるものではない。『キリスト教信仰の秘跡について (*De sacramentis christianae fidei*)』は、フーゴーの晩年にあたる 1134 年頃に著された大著であるが<sup>6</sup>、創造や墮罪、秘跡、終末などの広範な主題が取められ、13 世紀の神学者らに度々著わされた「大全 (summa)」の先駆けとして中世哲学史研究において関心が寄せられることも多い<sup>6</sup>。その他、フーゴーの作品は、聖書釈義や靈性神学、文法学、幾何学、年代記に関するものなど多岐に亘っているが、なかでも、靈性神学に関する著作は、近年のフーゴー研究において関心が高まりつつある領域であるとされる<sup>7</sup>。今回、解題と翻訳を試みた『愛の実体について』

---

<sup>4</sup> その他、機械的学芸に対するフーゴーの取り扱いが現代において持つ可能性を考察したイリイチの論考として、『シャドウ・ワーク』（岩波書店、1990年）：162-202頁がある。そこでの考察の対象はフーゴーの『哲学についてのディンディムスの対話 (*Epitome Dindimi in philosophiam*)』である。

<sup>5</sup> Bonaventura, *De reductione artium ad theologiam*, n.5: Anselmus in ratiocinatione, Bernardus in praedicatione, Richardus in contemplatione, Hugo vero omnia haec.

<sup>6</sup> 『キリスト教信仰の秘跡』は聖書の字義的な意味を学び終え、比喩的な意味を学ぶ段階にある読者を想定する。フーゴーはこの著作の意図を次のように説明する。Hugo de Sancto Victore, *De sacramentis christianae fidei*, prol. (PL 176, 186): Hanc enim quasi brevem quamdam summam omnium in unam seriem compegi, ut animus aliquid cretum haberet, cui intentionem affigere et con formare valeretur.

<sup>7</sup> P. Rorem, *Hugh of Saint Victor* (Great Medieval Thinkers) (Oxford: Oxford University Press, 2009): 11. Rorem はノアの箱舟の寓意を解釈した『ノアの道徳的箱舟について (*De archa Noe morali*)』、『ノアの神秘的箱舟について (*De archa Noe mystica*)』の二篇や、愛を主題とする作品を中心として、フー

もこの領域に属する小品である。

ところで、フーゴの著作には未だ真偽不明のものが少なからず存在する。『愛の実体について』も、J.P.ミーニュが1844年から20年余りをかけて逐次刊行した『ラテン教父全集 (*Patrologia Latina*)』ではフーゴの著作を収録した第176巻(15-18)と偽アウグスティヌスの著作を収録した第40巻(843-846)の二つに収められている<sup>8</sup>。しかし、この著作は、フーゴの没後間もない時期に作成された「サン・ヴィクトルのフーゴ師の全著作目録 (*Indiculum omnium scriptorum magistri Hugonis de Sancto Victore*)」に既に収録されており、1969年には靈性神学を主題とする他の作品とともにロジェ・バロンによって校訂され、現在ではフーゴの作品として認められている<sup>9</sup>。本翻訳で使用した底本もこのバロンによるものである。

さて、『愛の実体について』の冒頭で、我々を通じて起こる善と悪の一切は愛を起源として生じているとフーゴは述べている。この著作におけるフーゴの関心は、心の内に存在する一なる運動としての愛がどのような仕方でも引き裂かれ、善と悪という正反対のものを作り出すのかという問題を解明し、愛を正しいものとして秩序付けることにある。そこでのフーゴの議論がアウグスティヌスの思想的な枠組みを超え出るも

---

ゴの靈性神学に対する関心の高まりを指摘する。

<sup>8</sup> ただし、『愛の実体について』は、フーゴの著作を収録した『ラテン教父全集』第40巻に収められているものの、独立した作品としてではなく、『戒めへの教導 (*Institutiones in Decalogum*)』の第4章に置かれている。

<sup>9</sup> 『愛の実体について』の校訂者および仏語訳者であるバロンは、この著作がフーゴの著作を収めた重要な幾つかの写本に確認することができることを報告すると共に、オックスフォード大学のマートンカレッジに所蔵されている写本M.S.49に収められている「サン・ヴィクトルのフーゴ師の全著作目録」にその記載があると述べる。Hugues de Saint-Victor, *Six opuscules spirituels*, Introduction, texte critique, traduction et notes par Roger Baron (Paris: Les Éditions du Cerf, 2013): 25-29. この著作目録はフーゴの没後間もない時期にサン・ヴィクトル修道院の院長であったギルドゥイヌス (Guilduinus) によって作成されたものであり、フーゴの著作の真偽を検討する上での重要な手がかりであるという。D. Poirel, *Hugues de Saint-Victor. Initiations au Moyen-Âge* (Paris: Cerf, 1998): 27-86; P. Rorem, *op. cit.*, 13-14.

のではないことは、時折指摘されることである<sup>10</sup>。しかし、『愛の実体について』の議論に特徴的であるのは、フーゴーが愛を抱く人間の内面に焦点を定め、その分析を通して先の問題を論じようと試みていることである。ところで、『愛の実体について』の前半部において、愛とは人が或るものへとそのもの自身のために向かう心の喜びである（*amor est delectatio cordis alicuius ad aliquid propter aliquid*）と定義されているが、人はその情感を向ける対象を享受していないとき、欲望（*desiderium*）を通じてそれへと向けて走り出し、その対象を享受するとき、喜び（*gaudium*）を通じて停止する。つまり、愛は欲望を通じて対象の獲得を目指し、その獲得に喜びを見出すという一続きの運動の始点に位置づけられ、正しい愛の在り方は正しい欲望や正しい喜びの在り方と密接な繋がりを持つ。そこで、フーゴーが特に注目するのは欲望という運動が持つ多様なかたちである。実際、喜びが対象の内に休止するという一つのかたちしか持たないのに対し、欲望は何から生まれ（*de illo*）、何に寄り添い（*cum illo*）、何へと向かうのか（*in illud ad quod est*）という視点から区別され、その相違をもとに多様なかたちを採る。それゆえ、『愛の実体について』の後半部では、これら欲望に関わる三つの視点をもとに、神・隣人・世界に対する正しい愛の在り方が問われている。

こうした『愛の実体について』における論述は、その後の13世紀における情念論の展開との関わりにおいても興味深い。クヌーティラは始点から運動、終極へと至る自然学的な運動のプロセスをもとに個々の情念の関係を体系的に説明するトマスの情念論を評価するが<sup>11</sup>、その先達は『愛の実体について』における情念理解に求められる。その意味で、フーゴーの『愛の実体について』は、人間の持つ正しい愛の在り方とは何かというこの著作の本来の意図からだけでなく、個々の情念の関係を体系的に説明するためのフレームワークを提供するものとして、後の時代との関わりから読み解く上でも興味深い論考であると言えるだろう。

<sup>10</sup> 例えば、P. Rorem, *op. cit.*, 127などを参照。

<sup>11</sup> S. Knuuttila, *Emotions in Ancient and Medieval Philosophy* (Oxford: Clarendon Press, 2004): 200, 233–234, 243.

## 〔翻訳〕

サン・ヴィクトルのフーゴー 『愛の実体について』<sup>12</sup>

## I. 序文：愛の泉から流れ出る二つの小川

(1) 愛 (dilectio) が私たちの心に火花を散らし、情欲の炎を燃え上がらせるといったことのないように、日々、私たちは愛についての言葉を種として蒔いている。愛はあらゆるものを焼き滅ぼすか、あるいは浄化するかのどちらかだからである。実際、善であるものは全て愛に由来し、悪であるものも全て愛に由来する。私たちの内に湧き上がる愛という一つの泉は二つの小川となって流れ出る。ひとつは欲望 (cupiditas) という世界に対する愛 (amor) であり、いまひとつは愛徳 (caritas) という神に対する愛である。人間の心はその中央に置かれ、愛の泉はそこから湧き上がる。そして、欲求を通じて外なるものへと流れ落ちるとき、それは欲望と言われ、欲求を通じて内なるものへと向かうとき、それは愛徳と名付けられる。それゆえ、愛の泉から流れ出る欲望と愛徳という二つの小川が存在する。そして、あらゆる悪の根元が欲望であり、あらゆる善の根元が愛徳なのである<sup>13</sup>。したがって、あらゆる善はこの愛の泉

<sup>12</sup> “De substantia dilectionis”というタイトルにおける“substantia”という語は、ときに“natura”や“essentia”とも置換的に用いられるが、この著作中には一度も登場しない。“natura”は(3)で一度登場するが、タイトルの理解に関わるものではない。ここでの“substantia”という語が上記の語と区別された厳密な意味で用いられているとは思われないものの、フーゴーにおけるこの語の理解には十分な探求が必要であろうし、タイトルの訳にも若干の工夫が必要であるかもしれないが、ここでは言葉通りに「実体」と訳す。近代語訳では“La réalité de l’amour”, “L’essenza dell’amore”, “On the nature of love”, “On the substance of love”などと訳されている。

<sup>13</sup> Augustinus, *De diversis quaestionibus* 83, 35-36: Est enim (amor) turpis, quo animus se ipso inferiora sectatur, quae magis proprie cupiditas dicitur, omnium scilicet malorum radix (...) Amor rerum amandarum, charitas vel dilectio melius dicitur. (...) Deus igitur et animus quo amatur, charitas proprie dicitur purgatissima et consummata, si nihil aliud amatur; hanc et dilectionem dici placet.

を起源とし、あらゆる悪もそこに起源を持つ。それゆえ、それは私たちの内にあるところの偉大なものであり、私たちから起こるあらゆるものはそれに由来している。そして、これが愛なのである<sup>14</sup>。

(2) 愛とは一体どういったものなのだろうか。愛とはどれほど偉大なものなのだろうか。また、愛とはどこから生じるものなのだろうか。神の言葉も愛について語っている。この話題は絶えず貞節 (pudicitia) を汚しているような者たちには縁遠いものではないだろうか。愛の神秘を進んで受け入れる者たちがどれほど多いか、また、顔を赤らめることなく公衆の面前で愛を語る者たちがどれほど少ないかを見なさい。では、私たちはどのよう振る舞いをしているのだろうか。恐らく私たちは数々の不品行を重ねることで厚顔無恥な顔をしているだろう。実際、貞節を汚すような者であっても時として恥じ入らずには言えないような愛に関する言葉を私たちは臆面もなく語っているのだから。とはいえ、悪徳を探求し、それを取り除くことと、悪徳を褒めたたえ、徳や真理が愛されないことは同じではない。したがって、私たちは私たちの内に存在するどのようなものが欲求をさまざまなものへと分裂させ、一なる心を多くのものへと引き裂くのかを探求し、考察を行うが、それはそのことを理解し、理解することで、そのことに注意を向けるためなのである。絶えず貞節を汚すような者たちも同じことを探求するが、彼らはそれを理解し、理解することであえてそのような振る舞いをしているのである。

(3) ところで、愛とは本性においては個別的であり一なる心の運動でありながらも、働きにおいて区別される運動のことに他ならない。それは

<sup>14</sup> dilectio が「選択 (dis-electio)」に関わる愛のかたちであるのに対し、amor はより広範な愛のかたちであるが、ここでは同義的に用いられている。フーゴーにおける dilectio の厳密な用語法が確認できる箇所として、以下の箇所を参照。Hugo de Sancto Victore, *De laude caritatis* (PL 170, 972D): Dic mihi, o cor humanum, utrum magis eligis, semper gaudere cum hoc saeculo, an esse semper cum Deo ? (...) Dilige ergo ut eligias, dilige melius ut eligas salubrius. Dilige Deum, ut eligas esse cum Deo, ergo per dilectionem eligis.

また、フーゴーは聖書を典拠として caritas と dilectio は同義的であると考える。Ibid., *De sacramentis christianae fidei*, lib.2, pars.13, c.12 (PL170, 546A): Sacra Scriptura nobis dicit, quod dilectio caritas est, quod dilectio Dei semper bona est.

向かうべきではない対象に対して無秩序な仕方では動くときには欲望と言われ、秩序ある仕方では愛徳と名付けられる。それでは、私たちが愛と呼んでいる、この心の運動をどのような定義によって言い表すことができるのだろうか。この心の運動が完全に覆い隠され、知ることができないということのために、それが悪である場合には遠ざけたり、善である場合に欲したり、見つけたりすることができないといった事態が起きないように、この心の運動を入念に考察することは有益である。実際、この心の運動が悪である場合には悪が生じ、善である場合には善が生じるからである。

## Ⅱ. 愛の定義

(4) それでは、この心の運動をどのように定義すればよいのだろうか。それについて探求し、考えてみることにしよう。探求されるべきものは隠されており、それが内深くに置かれていれば心はそれだけ上記のいずれかの方向に支配されてしまうのである。

(5) 愛は人が或るものへとそのもの自身のために向かう心の喜びである (*amor est delectatio cordis alicuius ad aliquid propter aliquid*) ように思われるし、まさにそうなのである。愛とは希求することにおいて欲望 (*desiderium*) であるし、十分に享受することにおいて喜び (*gaudium*) である<sup>15</sup>。愛は欲望という仕方では走り出し、喜びという仕方では休止する<sup>16</sup>。おお、人間の心よ、ここにお前の善と悪がある。もしお前が善き

<sup>15</sup> Augustinus, *De civitate dei*, lib.14, c.7: Amor ergo inhians habere quod amatur, cupiditas est, id autem habens eoque fruens laetitia; fugiens quod ei aduersatur, timor est, idque si acciderit sentiens tristitia est.

<sup>16</sup> 愛、欲望、喜びという3つの情念を運動のプロセスに基づいて理解するフーゴーの考えは、12世紀後半に成立した擬アウグスティヌスの『霊と魂について (*De spiritu et anima*)』でも引用されている。この著作は12世紀後半に著者不明のシトー会士によって著された作品であるが、ラ・ロシュエルのヨハネスやヘールズのアレクサンデルらに活用された。Pseudo-Augustinus, *De spiritu et anima*, c.45 (PL 40, 813): De concupiscibilitate nascitur amor, et de amore desiderium et gaudium. Amor est delectatio cordis alicuius ad aliquid propter aliquid, per desiderium currens, atque per



ものであるとしたら、まさにこの仕方によってそうなのであり、悪しきものであるとしたら、この仕方によってそうなのである。つまり、お前が善ないしは悪であるのは、善であるものを善い仕方ないしは悪しき仕方であっていることによる。実際、存在するものは全て善きものであるから、善であるものが悪しき仕方であられたとしても、その善であるもの自体が悪なのではなく、むしろ、その善に対する愛が悪なのである<sup>17</sup>。したがって、愛を抱いている者が悪なのではないし、その者が愛を抱いている対象が悪なのでもない。また、その者が抱いているところの愛も悪ではない。むしろ、その者が悪しき仕方であっていることが悪なのである。そして、このことの内にあらゆる悪が存在する。したがって、愛徳を秩序あるものとして整えるのであれば、悪が生じることはない。

### Ⅲ. 秩序付けられた愛徳：神に対する愛と隣人に対する愛

(6) もし私たちが自らの望みに相応しいものであるのだとしたら、偉大なものを讃えたい<sup>18</sup>。全能なる神は至高の存在であり、真に善なる存在であるため、何らの不足も持たない。また、全てのもが神に由来しているため、神はそれによって自らが強められるようなものを他のものから受け取ることはない。さらに、全てのもは変わることのない仕方であらう。神の内には存在しているため、それによって弱められるようなものが神から取り去られることもない。神は何らかの必然性によるのではなく、ただ愛徳のみによって理性的な霊 (*rationalis spiritus*) を創造し、そうして理性的な霊は神の至福を分け有つ者となった。さらに、至福を享受するのに相応しいものにするために、愛が霊的な味覚 (*spiritalis palatum*) として授けられることで、理性的な霊はこの味覚によって内なる甘みさという味わいを楽しみ、この愛によって至福の快さよさを味わい、疲れを

---

*gaudium requiescens.*

<sup>17</sup> Augustinus, *Confessiones*, lib.7, c.12, 19.

<sup>18</sup> 「偉大なもの」は“*magna res*”の訳である。仏語訳者であるバロンによれば、フーゴーの念頭にあるのは神からもたらされる至福の存在である。Hugues de Saint-Victor, *Six opuscules spirituels*, Introduction, texte critique, traduction et notes par Roger Baron (Paris: Les Éditions du Cerf, 2013): 27.

知らない欲求をもとに至福に結び付くのである。それゆえ、愛を通じて神が自身と理性的な被造物を結び付けることで、理性的な被造物は自身が至福を享受するところの至高の善と常に結び付き、情感を通じてそれを吸い上げ、欲求を通じて飲み、喜びを通じて所有するのである。おお、吸いなさい、小さな蜂よ。吸いなさい。言葉では言い尽くし得ない、お前にとって甘美な善を吸い、飲みなさい。飛び込み、喉を潤しなさい。お前が飽きずに飲み続けたとしても、彼は欠乏することを知らないのだから。それゆえ、彼と結び付き、そのもとに留まることで、彼を享受し、楽しみを得なさい。この味わいが永遠であるとしたら、至福もまた永遠なのだから。

(7) 愛について語ったことを恥じるべきではないし、後悔すべきでもない。そこにこれほど大きな効能があることを悔やむべきではないし、そこにこれほど大きな威厳が備わっていることを恥じるべきではない。それゆえ、理性的な被造物は愛を通じて自らの創造主と交わりを持つわけであるが、二つのものを一つに結び付けることは愛の絆に固有なことであり、その結び目が強ければその分だけ幸福を享受することができる<sup>19</sup>。このことのために、分割することのできない交わりと完全な和合が二つのものに関わることで、神に対する愛と隣人に対する愛の内の二つの結び付きが存在することになる<sup>20</sup>。つまり、全ての者は、神に対する愛を通じて共に一つに結ばれ、隣人に対する愛を通じてお互いに一つになる (*ad invicem unum fieri*)。そうして、全ての者が結び付きを得たところ

<sup>19</sup> 「二つのものを一つに結び付けること」は“*ligare utrosque in idipsum*”の訳である。*idipsum*という語は *Ps.*, 4:9 や *Ps.*, 121:3 をはじめとしてウルガータ訳に度々登場するが、アウグスティヌスは常に同一性を保持する永遠的な存在としての神を表す名として理解する。Augustinus, *Enarrationes in Psalmum*, 121, 5: *Quid est idipsum ? Quod semper eodem modo est; quod non modo aliud, et modo aliud est ? Quid est ergo idipsum, nisi, quod est? Quid est quod est ? Quod aeternum est. Nam quod semper aliter atque aliter est, non est, quia non manet; non omnino non est, sed non summe est. Et quid est quod est, nisi ille qui quando mittebat Moysen, dixit illi: Ego sum qui sum ?*。フーゴーもアウグスティヌスと同様にときに神の名として理解する。Hugo de Sancto Victore, *Quid vere diligendum est*, I (PL 177, 563).

<sup>20</sup> Cf. *Mark.* 12.30-31.

のあの一つのもの（illum unum）から、自分一人では獲得することの出来ないものを、隣人に対する愛を通じて、隣人の内により十全かつ完全な仕方でも所有し、そうして全ての者が持つ善はそれら個々の者がお互いに手にするわけである<sup>21</sup>。

#### IV. 秩序付けられた愛徳：神，隣人，世界に対する愛

(8) 愛徳を秩序あるものとして整えなさい<sup>22</sup>。ところで、愛徳を秩序あるものにするとは、一体どういうことなのだろうか。もし愛が欲望であるのだとしたら、善い仕方でも走り（bene currere）、もし愛が喜びだとしたら、善い仕方でも休止する（bene requiescere）はずである<sup>23</sup>。実際、先に述べたように、愛とは人が或るもののためにそのものへと向かう心の喜びのことであるが、希求することにおいて欲望（desiderium）であり、十分に享受することにおいて喜び（gaudium）である<sup>24</sup>。愛は欲望という仕方でも走り、喜びという仕方でも休止する。欲望が求めることの内にあるのに対し、喜びは享受することの内にある。欲望を通じて走り、喜びを通じて休止するが、どこかに向かって走り、どこかで休止している。それではどこへ向かって走り、どこで休むのだろうか。もし愛がどこへ向

---

<sup>21</sup> 神を愛する人々はその愛において一つに結ばれる。そこで個々人が持つ善は相互に交換可能なものとなり、この交わりを通じて、自分一人では獲得することの出来ない多くの便益を獲得することができる。愛徳を通じて成立した交わりについて、フーゴーは『魂の手付け金についての独語録（Soliloquium de arrha animae）』で次のように述べている。Hugo de Sancto Victore, *Soliloquium de arrha animae* (PL 176, 959B): omnes autem in uno quasi unum diligant, ut unius dilectione unum fiant Iste amor unicus est non tamen privatus, solus nec tamen solitarius, participatus nec divisus, communis et singularis.

<sup>22</sup> Cf. *Cant.* 24.

<sup>23</sup> 愛は対象の獲得を目指す一続きの運動の始点に当たり、正しい愛を持つことは正しい欲望や正しい喜びを持つことに他ならない。以下では、欲望が何から生まれ（de illo）、何に寄り添い（cum illo）、何へと向かうのか（in illud ad quod est）という視点をもとに、神、隣人、世界という三者に対する愛の正しいあり方が検討されていく。

<sup>24</sup> II (5) を参照。

かって走り、どこで休むべきかを明瞭に説明できるとしたら、よく聞いておいてほしい。

(9) 善い仕方ないしは悪しき仕方で愛される対象として、神、隣人、世界という三つのものが存在している。神は私たちよりも上位のものであり、隣人は私たちと同等のものであり、世界は私たちよりも下位のものである。それでは愛徳を秩序あるものとして整えてみよう。もし走るとしたら善い仕方で走るはずであるし、休止するのだとしたり善い仕方で休むはずである。欲望は走り、喜びは休止する。喜びは一つのものの中に常に存在し、一つのかたち (uniforme) しか持たないから、変化を被ることはない。他方、欲望は運動による変化を被るから、一つのものの中に固定することなく、多様なかたち (varia species) を表出する。実際、走ることは全て、或るものから (de illo) であるか、或るものと共に (cum illo) であるか、そこへと欲望が向けられるところの或るものへ向けて (in illo ad quod est) であるかのいずれかである。それでは、私たちの欲望はどのような仕方で走るべきなのだろうか。神と隣人と世界という三つのものが存在するが、私たちの欲望の走らせ方において、神には三つのことが関わるのに対して、隣人には二つのことが関わり、世界には一つのことに関わる。そして、これが欲望において秩序付けられた愛徳である。

(10) 愛は欲望を通じて、神から、神と共に、神へと秩序付けられた仕方で走ることができる。神から受け取り、神を愛するようになるというとき、神から走っている。神の意志と何も対立しないとき、神と共に走っている。神のもとで休止したいと望むとき、神へと走っている。これらが神に対して関わる三つのことである。

(11) 隣人には二つのことが関わっている。つまり、欲望は隣人から、隣人と共に走ることができるが、隣人へと走ることはできない。隣人から

(12) 世界には一つのことに関わっている。つまり、世界から走ること

は認められるが、世界と共に、世界へと走ってはならない。神の外なる作品を見ることで、驚異と賛美をもって自己の内へと向かい、自己をより熱烈な仕方でも神へと向け直すとき、欲望は世界から走っている。しかし、もし時間的な事物の変わりやすさ (*mutabilitas*) に応じて逆境のときには落胆し、順境のときには高揚することで、この世界に自己を固定しているのだとしたら、この世界と共に走っていることになる<sup>25</sup>。そして、もしその喜びの内に常に憩うことを望んでいるのだとしたら、世界へと走っている。

(13) それゆえ、愛徳を秩序付けるのであれば、欲望を通じて神から走り、神と共に走り、神へと走ることになる。他方、隣人から、隣人と共に走ることは認められるが、隣人へと走ってはならない。さらに、世界から走ることは認められるが、世界と共に、世界へと走ってはならない。このようにただ神の内に喜びを通じて休止する。これが秩序付けられた愛徳であるが、これによらずに行われる全てのことは、秩序付けられた愛徳ではなく、無秩序な欲望なのである。

### 〔文献〕

1. 翻訳で使用した底本は次のものである。Hugues de Saint-Victor, *Six opus-cules spirituels*, Introduction, texte critique, traduction et notes par Roger Baron (Paris: Les Éditions du Cerf, 2013) 1942年から刊行されている Sources Chrétiennes (キリスト教原典叢書) シリーズのひとつであるこの書籍は、現時点で最新の校訂版である。
2. 翻訳に当たっては、上記書籍に収録されているフランス語訳とともに、以下の近代語訳も参照した。章の区分は底本に基づき、( )内の数字は段落

<sup>25</sup> 神が創造の業によって造り出した自然的世界は、それを読み解くことで人間を神のもとへと上昇させる一冊の書物である。Hugo de Sancto Victore, *De tribus diebus*, 4 (PL 176. 814BC): *Universus enim mundus iste sensibilis quasi liber est scripto digito Dei, hoc est virtute divina creatus, et singulae creaturae quasi figurae quaedam sunt, non humano placito inventae, sed divino arbitrio institutae ad manifestandum invisibilium Dei sapientiam; De sacramentis christianae fidei*, lib.1, pars.9, c.2 (PL 176. 317D).

に基づく通し番号である。また、各章のタイトルはフランス語訳を参考に作成した。

A Religious of C. S. M. V. (tr.), *Hugh of Saint-Victor, Selected Spiritual Writings* (New York: Harper & Row, 1962).

Hugh Feiss (ed.), *On Love: A Selection of Works of Hugh, Adam, Achard, Richard, and Godfrey of St. Victor* (Hyde Park, NY: New City Press, 2012).

Vincenzo Liccaro (tr.), *Didascalicon. I doni della promessa divina. L'essenza dell'amore. Discorso in lode del divino amore* (Milano: Rusconi, 1987).

3. 聖書の引用は、現行のヴルガータ (*Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem, editio tertia emendata*, [Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1983]) を使用した。
4. 翻訳および解題に当たって引用・参照したテキストは以下の通りである。  
(一次文献)

Augustinus, *Confessionum libri XIII*, ed. L. Verheijen, *Corpus Christianorum Series Latina* (hereafter CCSL) 27 (Trunhout: Brepols, 1981).

— 山田晶訳、『告白』世界の名著14 (中央公論社, 1968年)。

— *De civitate dei. Libri XI-XXII*, CCSL 48.

— 泉治典訳、『神の国(3)』アウグスティヌス著作集13 (教文館, 1981年)。

— *De diversis quaestionibus 83*, CCSL 44.

— *Enarrationes in Psalmum*, CCSL 38-40.

— 中川純男, 鎌田伊知郎, 泉治典, 林明弘訳、『詩篇注解(5)』アウグスティヌス著作集20/I (教文館, 2011年)。

Pseudo-Augustin, *De spiritu et anima*, ed. J.-P. Migne, *Patrologiae Cursus Completus, Series Latina* (hereafter PL) 40 (Paris: Garnier, 1854): 779-832.

Bonaventura, *De reductione artium ad theologiam*, ed. PP. Collegium S. Bonaventurae, in *Opera Omnia*, V (Quaracchi: Collegium S. Bonaventurae, 1901): 317-326.

— 「諸学芸の神学への還元」, 坂口昴吉 (編訳・監修), 『中世思想原典集成12 フランシスコ会学派』 (平凡社, 2001年) 所収, 451-474頁。

Hugo de Sancto Victore, *De sacramentis christianae fidei*, PL 176: 176-618.

— *Hugh of Saint Victor on the Christian Faith (De Sacramentis)*, tr. Roy J. Defferari (Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers, 1951).

— *De tribus dies (= Eruditionis Didascalicae, liber septimus)*, PL 176: 811-

849.

- *Soliloquium de arrha animae*, PL 176: 951-970.
- *Soliloquy on the Earnest Money of the Soul*, tr. Kevin Herbert (Milwaukee, Wisconsin: Marquette University Press, 1956).
- *De laude charitatis*, PL 176: 970-976.
- *Quid vere diligendum est*, PL 177: 563-565.

〈二次文献〉

- Coolman, Boyd Taylor, *The Theology of Hugh of St. Victor* (Cambridge, New York: Cambridge University Press, 2010).
- Illich, Ivan, *Shadow Work*. Open Forum Series (Boston, London: M. Boyars, 1981) 玉野井芳郎, 栗原彬訳, 『シャドウ・ワーク—生活のあり方を問う』(岩波書店, 1982年) 特に第5章「生き生きとした共生を求めて」を参照。
- *In the Vineyard of the Text: A Commentary to Hugh's 'Didascalicon'* (Chicago: University of Chicago Press, 1993) 岡部佳世訳, 『テキストのぶどう畑で』叢書・ウニベルシタス(法政大学出版局, 1995年)。
- Knuuttila, Simo, *Emotions in Ancient and Medieval Philosophy* (Oxford: Clarendon Press, 2004).
- Poirel, Dominique, *Hugues de Saint-Victor*. Initiations au Moyen-Âge (Paris: Cerf, 1998).
- Rorem, Paul, *Hugh of Saint Victor (Great Medieval Thinkers)* (Oxford: Oxford University Press, 2009).
- 片山寛, 「サン・ヴィクトルのフーゴー, その生涯」『西南学院大学神学部論集』第61巻(2004): 33-51頁。
- 白水浩信, 「Disciplinaの系譜学: サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』を読む」『北海道大学大学院教育学研究員紀要』第139号(2021): 1-68頁。
- 安田智博, 「後期イヴァン・イリイチにおける主体性/統治の別のあり方について——『テキストのぶどう畑で』のなかでの「読書」に関する考察——」『Core Ethics』vol.17(2021): 231-240頁

\* 本研究は JSPS 科研費 19K12969 の助成を受けたものです。

